

■原著■

作品研究：インガルス一家の物語

武田京子*

Kyoko TAKEDA

(1989年1月20日受理)

A study on The LITTLE HOUSE Books.

開拓者の生活を描いた、ローラ・インガルス・ワイルダーの自伝的小説「インガルス一家の物語」を社会背景、家族の形態、機能の歴史的な変化を重ね合わせ、「家族」の物語として読み解くことを試みた。作者が作家として活動をはじめた時期は、一人の女性として人生を総括する時期であると同時に、アメリカ社会の転換期でもあった。

このシリーズが現代に読み継がれる要因として、開拓時代の家庭生活の実態を知る手引き書であることと、現代の子ども、母親が望む「家族の理想像」が描かれていることにある。

〔キーワード〕 ローラ・インガルス・ワイルダー、開拓者、家族の機能、テレビシリーズ化

I ローラは、なぜ書いたのか

ローラ・インガルス・ワイルダーによる『大きな森の小さな家』が出版されたのは、彼女が65歳を迎えた、1932年のことであった。文章を書くことに興味を持ったのが48歳、作家としては遅すぎるスタートである。その後、すぐに「ミズーリ州農業者」、セントルイスの新聞、「ミズーリ農村生活者」の各紙に、近隣の農場のこと、自然、家庭生活に関するエッセイを書いた。

当時の女性にとって、40代後半がどのような人生の時期に当るのか、明確に把握することはでき

ない。しかし、ローラ自身には、ロッキーリッジファームの安定した生活があり、一人娘のローズは、すでに、サンフランシスコのButtetin誌の記者として活躍していた。ローラが少女時代に感じたのとは違った意味で、みちたりた「いま」を感じたとき、過去の経験を書きとめて置きたいと思ったのであろうか。

1915年、ローラ48歳の年は、一連の物語を書く大きな契機となった経験をした年である。8月、ローラはサンフランシスコの万国博覧会見物とローズ宅を訪問するため2ヶ月間、自宅を留守にした。彼女は、父親が死亡した際にドウ・スメット

*岩手大学教育学部家政科

へ帰った以外、これほど長期間に渡って留守にしたことはなかった。しかも、今回の旅は何の不安の材料もなく、日常生活と異った経験をし、未来を垣間見、過去をふり返える大きなきっかけになったことは間違いない。万国博覧会は、文明の最先端に行く技術、その他を多く展示するものであるが、ローラは、過去をふりかえる象徴ともいえる「パイオニア・マザー（開拓者の母）」という彫像と出会った。カリフォルニアの開拓時代を再現した、南太平洋鉄道の展示物の中にあつた、チャールズ・ガーフィーによるその作品は、開拓の道を進む人々を励ます婦人達の栄誉をたたえて作られたものであつた。二人のこどもを庇護するように立ち、サン・ボンネットをかぶった母親は、進むべき道を示すかのように右手をさし出している。鉄道の今日の繁栄以前には、幌馬車の苛酷な旅があり、そこには必ず、男達、子ども達、家族を支え励ましたパイオニア・マザーが多数いたことをローラに思い出させたに違いない。そして、文明が更に進み、当時のことを語る人々がいなくなると、これらの昔の記憶が風化してしまう危機感を持ったに違いない。

また、この旅はローラにとって、「文章を書くことが収入になる。」ことを知り得る機会となつた。娘のローズは、電信技術者、女実業家、新聞の執筆者兼通信員となり、世界中を旅行し活躍していた。ローラの滞在中も鉄道の物語やクライスラーの演奏会及びインタビュー記事などを書く仕事に忙殺されていた。「ローズに書くことのコツを教えてもらって、何か書くことができたなら、たぶん売ることができるだろう¹⁾」とローラは夫、アルマンゾに宛てた手紙に書いている。(9月13日付)ローズがどんな風に仕事をするかがわかってくるにつれて、「自分でも出来るという自信が付き、ローズとは違って、どこかで見聞きしたものを書くのではなく、自分の場所にとどまって感じたことを書く方が向いている」のに気付く。(10月4日付)ローラが、交通事故に遭つたことを知らせ

るローズの手紙の中には、「ミズーリ農村生活社紙から、いくつかの記事を依頼されたこと。来週中には書き上げ、いくらかの報酬を得ることになっていること」を知らせている。サンフランシスコ滞在中に、ローラは、書く技術を習得し、ローズの助言を受けながら、執筆者として一人前になりつつあつた。この記事は好評だつたらしく、博覧会終了後、ミズーリ州の展示物に関する記事を書き、博覧会の食べ物に関して作り方付きの記事を書いている。サンフランシスコからアルマンゾに宛てた最後の手紙には、「私は他のものを書くことで忙しいか、又は、手紙が届くまでに私の方が先に着いてしまうから、もう私から手紙を書くことはありません。」と書いている。(10月22日付)

彼女が書くことに目覚める下地として持っていた文章表現力、情景をこまかく読みとり適確に言葉に直す能力は、少女時代から培われてきたものであつた。姉、メアリーが失明した後、「こんどは姉の眼の代わりになって、自分の見たことを言葉で表現することを父親に約束し、実行したこと」「ブッチャー学校での教員生活を終え、また生徒として学校に戻つたとき、宿題の作文を短時間で仕上げ最高点を取り、文章を書くことに楽しみを見出したこと」からも推しはかることができるだろう。また、見たこと、感じたことを忠実に記録することは、ドウ・スメットからビッグ・アップル・ランドへの45日間の旅を克明に記録したことで既に経験済みのことであつた。読者を意識した書き方、技術を身につけることによって、自分自身の覚え書き(記憶)を書き直して行く作業は、ローラにとって楽しみをもたらす作業になったに違いない。ローラの技量が明確になるにつれ、ミズーリ州農業生活者紙は、新しい紙面をさき、「ある農場婦人の思い」というタイトルで連載を始めた。内容は、母親であること、家庭生活に関するお説教で古めかしいものであつたが、「時代おくれに見えようとも、持ちつづけ、伝えつづけていくに値する考えや価値がいくつかあるのだ²⁾」とい

うローラの主張を述べたものであった。

ここで、40代後半という年齢を合わせて考えてみるならば、子育ての完了、生活の安定という人生の一区切りの時は、『それは、多くの人々が満足とはいえない気持で過去をふりかえり、希望とはいえない思いで将来を考える、あの、人生のためらいの時期³⁾』であり、ローラの身边には、都会の狂気の中であくせくもがいている人々の姿があったのである。そして、幼いときに感じた満足感、心の安らぎの重要性に気づき、書きとめておくことの必要を痛感したにちがいない。『わたしは思うのです。生きることに価値を与えるのは、人生の基本的なことがらなのです。それはつまり、愛、義務、労働、休息、自然に親しい生活といった、すばらしい根本的なことがらなのです。』⁴⁾そして、人生の収穫期を迎えるにあたって、『目にみえない、もっと大切な収穫を数える⁵⁾』必要を感じたのである。ローラにとってパイオニア・マザーであった、母キャロラインの死(1924)、姉メアリーの死、そして、世の中は大恐慌の渦にまき込まれていた。国全体が、「アメリカとは何か」「これが、あの希望に満ちた、あこがれの土地なのか」と問いかけていた。ローラは、開拓当時の生き証人として、両親から聞いた祖先の記憶と自分の経験を記録する仕事に着手したのである。

II 「家族」のテキストとしての「インガルス一家」の物語

ローラの父方の家系は、フランス系カナダ人の流れを汲み、母方の家系は、コネティカットヤンキーである。ヨーロッパ各地から移民してきた人々はヤンキー(アメリカ人)として新しい人種を形成しつつあった。両方に共通していることは、「移住をくり返えず、動きまわる血統」である。ローラが父親や母親の昔語りや、自分の体験から把握した家族像は、1820年代から約100年間の西部開拓史上の家族像といえる。

1 開拓者にとっての家族

開拓者の家族は、南部のプランテーションを中心とした農業社会とは異なり、結婚によって次々と新しい一家を構える核家族である。出生児数は多いが乳幼児の死亡率は高く、結局、家族員は4~6人が普通であった。「結婚」は労働力の確保を、「出産及び育児」は労働の成果を継承することを意味していた。子どもであっても、成長に従って、それぞれの力量に応じた労働(仕事)が与えられた。子どものある未亡人は、労働の即戦力と考えられ、高く評価されたという。社会の中で男女比は、女1に対して男2~6であり、女性は暗黙のうちに結婚を強要された。開拓生活そのものに女手が必要であったことから、再婚は多かったという。家庭生活は、ピューリタンの道徳観を土台とし、相互の愛情を求め、家父長制の伝統に基づく夫の賢明な指導と妻の服従を理想として展開していった。

2 男性の仕事、女性の仕事

開拓者の男性は、新しい土地を開墾し農地として整備することが第一の仕事であった。開拓を主目的とする者は、安く手に入れた荒地を開墾し、農地にして転売し利鞘を収入とした。また、開墾した土地に定住し、農地を更に広げ肥沃にし、農業収入を生活の基盤とする者もあった。いずれにしても、はじめの数年間の生活は苦しく、現金収入が殆んど期待できない場合には、野生動物の毛皮を集めて物々交換をしたり、大工、鉄道敷設、カウボーイなどの日雇い仕事をして自給自足できない物資の購入に当てた。これらの賃労働をする場合、家族を置いて出かけることも多く、交通・通信が密に出来なかった当時は、生命の不安を感じさせるものであった。男の働き手を一時的に欠く場合、その不足を家族、主に主婦が補い、更に生じた労働力の不足は、近隣の人々の協力をたのんだ。家の建築、井戸掘り、収穫等、多くの労働力を必要とする場合にも近隣の労働力は提供され

た。伝統的な家父長制が強かった東部社会からやってきた開拓者たちは、夫婦が相互に協力しなければ生活することが不可能な状況に置かれ、自然に家庭内に於ける女性の地位の向上につながっていった。

女性は、妻として、母として、好き嫌いに関係なくたくさんの仕事をこなさなければならなかった。単に「食事づくり」といっても、献立を考え調理するだけでなく、野菜の栽培、養鶏、乳牛の飼育、乳製品作り、ハム、ベーコン、ソーセージ、ピクルス、ジャムなどの貯蔵品作りまでが含まれていた。衣生活に関することも同様で、糸紡ぎ、染め、織り、編み物、洗たく、アイロンかけ、帽子、靴作りまで家庭内で行われていた。女性は育児・家事を中心にした労働の他に、生産機能を担う存在として期待されていたが、あくまでも軽作業中心であり、男性の補助としての役目にとどまった。男性と同じ作業を行うことは敬遠された。社会全般の人手不足から、あらゆる職種が女性にも開かれていたというが、実際は死別した夫や父親の仕事を引き継いで行う場合がほとんどであった。

開拓の先端地域では、単身者のための食事作り、シャツの縫製、洗たくなどの仕事が重要であり、ローラ自身も縫い子、食事づくりの仕事を行った。時代とともに女性の職種は拡大し、妹キャリーは活字印刷工、娘ローズはジャーナリストとして活動の場が広がっていった。

家計管理もまた、女性の仕事であった。農地の購入、売却の決定権は男性にあったが、日常の家庭内の物品や金銭の管理は女性が行った。実際は金銭のやりくりよりも物品の有効な活用が中心であり、布地など新しい物が購入できない場合には、きょうだい間でお下がりとは当然のこと、小布、古布に至るまで保管し活用した。

3 家族の機能

社会の最小単位として家族という集団が存在す

る、というのが一般的な考え方であるが、開拓者にとっては、家族そのものが社会生活であることが多かった。他の親族との接触は、年に数回あるかないかであったし、近隣の人々との接触も少なかった状態では、家族の協力なしで生活することは不可能であり、現代の家族と比較すると膨大な機能を持っていたはずである。

アメリカの社会学者、オグバーンは、家庭で行われるさまざまな仕事に関する実証的な研究を行っている。産業化により家族の機能が縮小したと論じ、近代工業が勃興し、大量生産が可能になり大量消費が実現し、そのために職業の専門化と専門的なものの制度化が進んだという。1930年、農場家族の3分の2、農村市街地家族の4分の3、都市家族の10分の9がパン工場製のパンを食べ、自家製のパンを焼く家族は、予想以上に減少していたという。他に缶詰め造り、男子服の仕立てが行われなくなり、レストランが増加し外食の機会が増加した。経済的機能の縮小は住生活にも反映し部屋数が減少した。家庭内の生産活動に参加する女性の分野が少なくなった反面、家庭の外へ仕事をする女性が増加した。以前の家族は、経済(生産と消費)、地位付与、教育、保護、宗教、愛情、娯楽という7つの機能をはたし、そのために影響力と威信を持っていた。しかし、時代の流れとともに、愛情以外の機能は企業、学校、政府などの専門的な組織に吸収され、家族から失われるか残っていても弱まった。

ローラが「インガルス一家の物語」で語った家族の生活は、少しずつ近代化の動きが変化をもたらしつつあったが、オグバーンの言う以前の家族の機能は維持していたと言える。

① 経済機能

衣食住にわたって基本的な考えとして、「自分たちで作れるものは作る。どうしても必要なものは物々交換で入手する。代用できるものは出来るだけ工夫する。無しで済ませることが出来るなら、

手に入るまで我慢する。」ということがはっきりしていた。

ローラの家では布を購入し仕立ては自分の家で行った。アルマンゾの家では、羊を飼い羊毛を梳くことは機械に頼ったが、紡ぎ・草木染めをし、手織で布にし家族の服を仕立てている。下着、それに付けるレース、くつ下、セーター等も全て家庭内で作られた。縫い物は、上手、下手にかかわらずこなさなければいけない主婦の仕事であった。新しい布の裁断は母親が担当し、裏返しをして縫い直すのは女の子に割り当て、縫い方の技術を修得するのである。敷物、カーテン、シーツなども家庭内の手作業で作られた。

食に関しては、主食副食の農作業の栽培、家畜の飼育、野生動物の捕獲も自分たちで行った。パンを焼く際にイーストが手に入らなければ、パン種を残しておき自然の発酵を待ち「サワードウ」として使用するなどの工夫を行った。材料は余すところなく活用し、牛を一頭殺した時には様々な加工食品の他にローソクや石けんまで作り出した。

入植初期の農地から生産が期待できない場合には、最小限のパンを焼くための小麦だけを購入し、卵、ハム、ソーセージなどを食べることはあきらめ、一番安い豚の塩づけ肉を、常食としたのである。

住いに関しては、ウィスコンシンの大きな森、大草原、プラムクリークとどこへ移住しても自分達の家、井戸、炉、家具は自分達の手で作った。木材の切り倒し、製材は自分で行い、購入するのは、屋根ふき用の薄い木材、窓用ガラス、釘だけであった。テーブル、揺り椅子、飾り棚作りは、夜や冬の手間仕事として行われた。寝具作りは、主婦の仕事であり、古くなった衣服を活用し、これらのものが作られた。マットレスの中には干し草が詰められ、春と秋の大掃除の際に外側は洗たくされ、中身は入れかえられた。衣生活の中で、近代化のしるしを探がすとすれば、ミシンがそれにあたるであろう。ミシンは、1846年、エリアー

ス・ホーによって発明された。その後シンガーマシンが量産され、1863年、12ヶ所の工場で7万台のミシンが生産された。同じ頃、イギリス国内での生産高は2万5千台であったというから、アメリカでの普及率が高かったといえる。ローラが、クランシーさんの店ではじめてミシンを見たのは、1881年のことであり、ローラの婚礼衣装づくりのために購入されたのは、その4年後のことである。

② 教育機能

教育については、一人前の生活が出来る能力を身につけさせる面と人格を形成する面の二面が考えられる。男の子は幼いときから、一人前の百姓になるための農作物、家畜の知識と技術の習得が年齢に応じた作業の分担という形で行われた。アルマンゾは、仔牛の世話、乳しぼり、仔牛ならし、種イモ植え、野菜のタネまき、丸太運び、羊毛刈りの手伝いをしながら、自分の目で見て身につけることをくり返して行く。女の子も同様に、皿洗い、ベッドメイキング、洗たく、食事づくり、野菜の手入れと収穫、ニワトリの世話、縫い物、編み物を手伝いながら覚えて行く。日常生活を通して生活技術を身につけると同時に人格教育も行われた。

学校教育に関しては、人口調査簿に、ある程度の記録は残っている。学校は、開拓の先端の土地では常設のものではなく、期間を区切って教員が派遣されたり、土地に住む有資格者が教師となって開設された。年齢構成は様々で、時には、教師の方が生徒よりも年齢が低いことさえあった。ローラがメアリーとはじめて学校へ通うようになったのは、1875年ローラが8歳の時である。教科書は共通のものを使用していたので、学校へ行けないときには、自習することが可能であった。ローラの母、キャロラインは、結婚前に教員をしていた経験があり、教育には熱心で子どもはできるかぎり学校へ通わせること、子どものうち一人は教員にさせたいという希望を持っていた。教育の資格を

